＜研究論文＞

千葉市域の縄文中期後半期遺跡の分布と立地
東京湾東岸における縄文中期終末期集落研究への指針(1)

青　沼　道　文

はじめに

1960年代の経済成長期に発する緊急発掘調査の急激な増加は、その規模・件数ともに減じることなく今日に至っている。特に我々主都圏域で、行政調査に携さわってきた者にとっては、手に余り保管場所にさえ窮する状態で山積された資料を抱えている現状がある。それらの資料にも徐々にではあるが、整理の手が加えられ、汎日本的なデータの集積・分析の方向が模索されるようになった昨今、縄文時代研究においても、従来の出土遺物の比較研究的方法から脱却し、歴史的復原の方向性が示されるようになりつつある。自然科学等の関連諸科学の導入のもとに自然環境の復原、生活・生産様式の復原、更には精神生活の面にまでその領域は広げられている。しかしながらブームといわれる原始・古代に対する一般のファンタジー的な関心の高まりの中で、特殊遺物・遺構が過大にとりあげられたり、想像の域にとどまると思われる一種飛躍的な復原結果を見聞することも少なくない。より具体性をもたせ、理解を促す手段として平易な表現を目指す方法かも知れないが、少なからず、縄文時代研究の成果は、その段階まで達し得ていないのでは、という疑念を抱かざるを得ない。

縄文集落の研究という大きな流れは宮坂英弐氏の研究以来、各期・各地域ごとに多面的に展開されてきた（註１）。　近年においては個々の遺跡の単位的研究の枠を出て、遺跡相互間の関連、あるいは限定された地域内での遺跡の相関関係の中から集落を解明しようとする方法、例えば、林謙作氏の「領域論」（註２）や小林達雄氏の「セトルメント・パターン」（註３）などに基づく研究が試みられるようになってきている。一見より具体的になったかにみえる研究方法も、後藤守一氏により「古代聚落の研究は、その一歩も踏み出してゐない。」といわしめて以来50年後の現在、「この集落研究の停滞性は“集落を集落としてとらえる問題意識や研究態度の欠如にこそ”根本的な問題があり、集落の概念や集落研究の目的意識において、学界の共通理解が乏しいからである」（註４）状況であるとすれば、個々の研究は極めて辛辣なギャップを生じさせることになる。ひとつには異目的に急激に進行した発掘調査の進行であり、発掘に追われるあまり、資料整理が追いつかず理論のみが先行した結果のギャップかもしれない。本稿ではこれらの問題点をふまえ基礎資料の整理を試みたい。当面千葉市域を限定する。

以後範囲を広げ集落の分析へと稿を進める所存である。

註1. 宮坂英弐　1946　「尖石先史聚落址の研究」　諏訪史談会報3
和島誠一　1948　「原始集落の構成」　『日本歴史学講座1』
和島誠一・岡本勇　1958　「南掘貝塚と原始集落」　『横浜市史1』
などは原始集落研究の体系を確立した文献であり、その方法論は現在に継承されており、言い替えるならばこれらの理論的枠組を超えていないということかもしれない。

註2. 林謙作　1974　「縄文期の集団領域」　考古学研究20－4・　1979　「縄文期の集落と領域」　日本考古学を学ぶ　同　1988　の他　戸沢充則・『市川市史』など。

註3. 小林達雄　1973　「多摩ニュータウンの先住者－主として縄文時代のセトルメント・システムについて」　月刊文財3・　1980　「縄文時代の集落」　国史学110. 111 合併号　他　宮崎博　1986　「土地と縄文人」　物質文化 47.　1985　広瀬昭弘他の野川流域の研究などの分析もある。

註4. 後藤和民　1988　「縄文集落論」　『論争・学説　日本考古学第2巻』

Ⅰ　時期と地域の設定

いうまでもなく我国の近代考古学は、エドワード・S・モースの東京都大森貝塚の発掘を初源とする。その後の邦人による考古学的調査も貝塚を中心に行なわれ、学としての基盤は、貝塚調査の中で築かれたといっても過言ではなかろう。特に東京湾をとりまく大型貝塚群は、当初より先学の着目されるところとなった。

縄文時代早期に始まる貝塚の形成は、縄文人の食生活の中にひとつの転換をみるとともにその後数千年に及ぶ、生活史のあるときは中心的役割を示した。その時期が、縄文時代の中期であり、後期である。大型貝塚の形成については、生成・形成過程・集落との関係等々研究途上の中で解明されない部分が多く残されているが、大型貝塚の形成された時期が所謂中期後半期と後期に限定され、更には中期終末期に於いては、貝塚文化は継承するものの規模が極めて縮小する事実が確認されている。このことについてはいくつかの論考がされているが（註1）、貝塚盛期の大型貝塚を伴う集落の実像、大型貝塚の崩壊期、すなわち中期終末から後期初頭への集結があり、何等かの要因により貝塚形成ができなくなった段階での集落の移動を、東京湾東岸域の縄文中期の大型貝塚が最も密集している地域である、千葉市を中心とした東京湾東岸中央部に限定して、遺跡分布の上から明らかにしてみたい。

東京湾の概念としては、「房総半島の西端洲崎と三浦半島の剣ケ崎を結ぶ線以北である。このうち、内湾または狭義の東京湾と呼ばれるのは、房総側富津岬と三浦側観音崎を結ぶ線以北」（註2）で、神奈川県・東京都の西岸・縄文前期には栃木県・群馬県・埼玉県に入り込んだ、千葉県北部を含む奥東京湾、房総半島沿岸の東岸に分けることができる。本稿では、東岸地域を更に三分割し、習志野市・船橋市・市川市及び周辺を北部・千葉市域を中央部・市原市以北

を南部として、中央部を主に検討を加えてゆきたい。

千葉市域を東京湾東岸の一地域とした根拠としては、所謂中期の大型貝塚が、葭川流域の廿五里北貝塚、廿五里南貝塚を市域の最も北として、船橋市を流れる海老川流域の高根木戸貝塚との間、直線距離にして約10㎞には所在しない。すなわち習志野市を流れる菊田川・千葉市の浜田川・花見川・汐田川の流域には認められず、南側についても、村田川流域の有吉貝塚・草刈貝塚を南限として養老川流域の山倉貝塚までの間には、大型貝塚は所在しない。市域の10数㎞の間に13ケ所もの所在が認められることからすると、一つの地域を画していると考えられ、他地域との差を認めることができよう。また本稿の目的は、縄文中期終末期集落の様相を解く指針とするため、その前段の主要遺跡である。大型貝塚を大型集落として捉え、大型貝塚遺跡をメルクマールとして以下の記述を行うものである。遺跡・集落についても、その概念規定は種々論じられているが、地域を限定し、まして時間的にも短期間を考察してゆく場合、既に発掘調査が行なわれ、報告書の刊行が成されている資料は限られるため、遺物の散布状況から、遺跡の規模・種別を類推せざるを得ない。

第1図・主要遺跡一覧作製にあたっては、文献1・6・7・17・19・41・43・51を使用し、既刊報告資料を基底として90遺跡を抽出した。

註1. 小川和博　1980　「千葉県における縄文中期末の居住形態」『大野政治先生古稀記念論集』
山本暉久　1980　「縄文中期終末の集落」神奈川考古9
鈴木保彦　1985　「縄文集落の衰退と配石遺構の出現」『八幡一郎先生頌寿記念論文集』　六興出版
鈴木保彦　1986　「中部・南関東地域における縄文集落の変遷」『考古学雑誌』第71巻4号
註2. 武田宗久　1989　「縄文時代における東京湾東岸地域の海進・海退(1)」『千葉市立加曽利貝塚博物館20周年記念特別講座講演集』

Ⅱ　遺跡分布と立地

千葉市域には先土器時代から中近世までの 1200余遺跡が確認されている。そのうち中期後半期の土器散布が認められる地点は、280ケ所に及ぶ。これらはいずれも中小の河川ではあるが、浜田川・花見川・汐田川・葭川・都川・村田川の東京湾に流れ込むものと、印旛沼に流入する鹿島川を主河川として、流域、あるいはそれら河川の形成する支谷に面した洪積世台地上に散見される。北総台地の南西部にあたる当該地域は、標高10数ｍから60ｍ前後の起伏の少ない平坦な台地形と、樹枝状に複雑に刻まれる小支谷により形成されている。地形的に観た限り居住・移動の障害となる、山地形、深い峡谷等は全く認められないという地域的特徴を持つ。

貝塚遺跡が多く残されていることから、縄文時代海進あるいは海退について古くから論じられているが、杉原重夫氏等は市内のボーリング調査の結果から、縄文時代各期の海岸線の復原を行っており、中期から後期にかけての時代は現在の等高線でみると3ｍから5ｍのラインが

当てられるとみてよさそうである（第２図）（註１）。　浜田川・花見川の下流域、葭川・都川の下流域には、砂洲地形が形成されており、貝類の採取はその外側になると推察されることから、浜野浦付近で海岸線が台地に近接する他は、埋立工事前の汀線から１㎞内外内陸に寄る程度ではないかと考えられる。

1.　都川流域

都川は延長 19.5 ㎞、流域面積 67.5 ㎢といわれ、ほぼ市域を二分するように東から西へ流れ東京湾に注ぐ。水源を高田町付近に持つ本流と、誉田町１丁目付近に持つ仁戸名支流が、加曽利町・都町境の下流で合流する。中流域では古山支谷への分流・坂月川との合流が認められ、ここでは、遺跡の集中度により四区分を行い概観してゆく。

(1)　古山支谷と大道山支谷

都川を現在の河口より４㎞程さかのぼる加曽利町と太田町を画する北側へ入る支谷を古山支谷という。この支谷の 2.5 ㎞奥西側の標高30 ｍの台地上には加曽利貝塚 (30) が所在する。加曽利貝塚は直径 130 ｍの環状に廻る北貝塚と、200 ｍ× 170 ｍに広がる馬蹄形を呈する南貝塚を主体とし、遺物包蔵域は貝塚外縁部に大きく広がることが確認されている。東西は東側の緩斜面を含め 600 ｍ、南北は約 900 ｍをあてることができる。北貝塚は古山支谷に面し、南貝塚は東側に緩斜面地を要し、南側は西に向い小支谷が入り込み遺跡の南限を画している。加曽利貝塚は周知のように貝塚規模が大きいだけでなく、縄文時代早期から晩期に亘り、ヒトの生活の痕跡を残す長期継続型の遺跡である。貝塚の形成は北貝塚では中期に、南貝塚では後期にあてられるが、大量の貝の消費時期をみると、北貝塚では阿玉台期を始期に加曽利ＥⅠ期・ＥⅡ期におわり、南貝塚は加曽利ＥⅡ期の貝層が認められるものの後期堀之内Ⅰ期から加曽利Ｂ期を主体に安行Ⅰ期に貝塚形成がされたことが確認されている。住居址の検出状況からみると、1962・65～68年度の北貝塚の調査の結果から、勝坂・阿玉台期12址・中峠期６址・加曽利ＥⅠ・ＥⅡ期35址、後期は総数９址と減少する。1964 年の南貝塚の調査では、勝坂・阿玉台期４址・加曽利ＥⅠ・ＥⅡ期４址に反し後期は22址となり、全く逆の傾向をうかがわせる。いずれもトレンチ等の部分的な調査で、集落形成の全体を推し測ることはできないが、貝塚の形成期との関連は把握できる。ここで注目されるのは、貝塚形成期において加曽利ＥⅢ・ＥⅣ期の遺構・遺物がほとんど発見することがない事実であり、1970・71 年に行なわれた南貝塚東傾斜面の調査では、加曽利ＥⅡ期からＥⅢ期の住居址及び土壙群が検出されている。貝塚西側の台地奥部の包含地地域では、遺構内投棄の小規模貝塚を伴うＥⅢ期からＥⅣ期にかけての住居址が多く検出され、貝層主体からはずれてゆく傾向を示していることである。

北貝塚の北方約 250 ｍの地点は 1984 年千葉都市モノレール線下の工事に先行して、京願台遺

跡(31)が調査され、加曽利ＥⅡ期の住居址４址のほか阿玉台期１基・中峠期２基・加曽利ＥⅠ期２基・ＥⅡ期４基・ＥⅢ期５基の土壙群が検出されており、加曽利貝塚の集落遺跡としての広がりを暗示している。

加曽利貝塚の対岸、古山支谷をはさむ北東の標高33ｍの台地上及び斜面地にかけて、直径約120ｍに７箇所の点列環状を呈する滑橋貝塚(33)が所在する。貝層本体については、未調査のため、形成時期等について断定はできないが、テニスコート拡張に伴う貝層北側に接する地点のトレンチによる確認調査が1984年に行なわれ、ＥⅢ期からＥⅣ期の住居址７址が確認され、出土遺物も同期の土器が全体の90％を占めたことから、ＥⅢ期以後形成された貝塚である可能性を持つが、加曽利貝塚等でみられるように貝層下に、先行する時期の集落が営なまれたものかもしれない。

滑橋貝塚の北側には古山支谷から入る浅い弱れ谷があり、標高29ｍと一段低い台地上に広ケ作遺跡(34)が所在する。1981年宅地造成に伴い5,000㎡が調査され、加曽利ＥⅢ期４址、ＥⅣ期１（ないし３）址の住居址が調査された。いずれも住居址内にブロック状の遺構内投棄貝層が認められた。遺跡は更に東方に広がる様相を示し、近接する滑橋貝塚との関連も深い遺跡である。更には加曽利貝塚の集落との関係も考えなければならない。

加曽利貝塚を都川本流に向かい1.2㎞下降すると大道山支谷との分岐点に至る。大道山支谷を北東に1.2㎞さかのぼる西側の台地上標高31ｍに中薙遺跡(35)がある。広大な平坦台地上で支谷よりはなれて立地し、東側谷津までは100ｍを測る。1984年千葉東警察署建設に先行する調査として約5,000㎡が調査され、調査区の東側を主体にいずれも加曽利ＥⅣ期の住居址が検出された。1979年にも加曽利Ｅ終末期の住居址１址が調査されており、遺構配置は円環状を呈する集落遺跡となる。001・002住居址からは、廃居内投棄の貝層が認められている。前後の時期の遺物はほとんど検出されておらず、加曽利ＥⅣ期の単期間営まれた集落遺跡といえる。

中薙遺跡の南東約600ｍにさらに坊貝塚(36)があり、その北側に蕨立貝塚(37)が所在した。1960年代中頃周辺域に大型団地の造成工事が行なわれ、大半が崩壊した。いずれも地点貝塚からなる点列環状を形成する集落遺跡である。両貝塚の距離的な位置関係は、120ｍ程で大道山支谷からわずかに入り込む支谷によりへだてられている。標高は32ｍ～34ｍの台地上で、蕨立貝塚のほうが谷奥の谷頭部に位置する。小支谷をはさんで対峙する大型貝塚の立地形態は、月ノ木貝塚(61)とへたの台貝塚(60)などに近似する。造成時期が早かったために行政的対応も不充分で、部分的な調査しか行なわれていないが、蕨立貝塚では加曽利ＥⅠ期を主体とする住居址31址が、さら坊貝塚ではわずか１址の加曽利ＥⅠ期の住居址が調査されている。蕨立貝塚については後年残存していた部分が調査され、阿玉台期の土器を多量に包含する地点が調査されており、両者とも阿玉台期に創始し、加曽利ＥⅠ期を盛期とする遺跡とみてよかろう。海岸線からの位置関係からみてさほど差のない加曽利貝塚との比較から、ほぼ同時期に営なまれた集

落にもかかわらず、貝塚形成規模が著しく異なる点その因を究明する必要を感じる。武田宗久氏は、『千葉市誌』の中で「本貝塚はやがて環状貝塚を構成せんとした過程にある様相を示している。」との所見を示されたが、住居址数・時間的継続性を考慮した場合、集落あるいは集団の性格（註２）、あるいは経済的基盤が異なったものと考えたほうがよいのかもしれない。

(2) 都川中流域

古山支谷の本流との分岐点より上流を一応中流域とする。このあたりは左岸に幅の広い河成段丘地形が発達しており、弥生時代から、古墳・奈良・平安時代の大規模遺跡が点在する。縄文時代中期の遺跡は比較的稀薄で、調査の記録もほとんどない。押元貝塚 (39) は、後期の大型貝塚遺跡で、中期の貝塚形成は確認されていないが、加曽利Ｅ期の遺物散布は顕著である。龍ノ谷遺跡 (40) は、都川本流に面する標高32ｍの台地上及び河成段丘上に広がる地点貝塚を有する遺跡である。散布している土器は加曽利ＥⅠ・ＥⅡ期を主体に、阿玉台・堀之内Ⅰ期も認められている。網田遺跡 (41) も同様の立地形を示し、加曽利Ｅ期の土器散布が認められている。いずれも中期においては大規模な集落を形成する遺跡とはなっていない。

(3) 都川上流域

多部田支谷との分岐点より上流を上流域として捉えておく。この流域は鹿島川のきざむ支谷と入り組む複雑な地形を形成し、多くの分水嶺地形が認められる。縄文時代中期においては貝塚の形成は確認されておらず、遺物散布地及び貝塚を伴なわない集落遺跡で、台地標高も40ｍを越える。

北谷津上ノ台遺跡 (42) は、古山支谷の分岐点より本流沿いに 2.5 ㎞さかのぼる右岸の舌状台地上に位置する。標高41ｍを測る台地の西側及び東側に小さな支谷が刻まれ、西側支谷は台地基部でくびれ部を形成させており、島状の台地形を残している。この台地の面積は約30万㎡と広大で、全面に加曽利Ｅ期を中心に阿玉台期から堀之内期にかけての土器を広く散布する。本流を更に 1.5 ㎞さかのぼると佐和町へ向う谷津とＹ字形の分岐点に至る。本流側左岸の標高34ｍの台地上、浅く北東に入り込む谷津の谷頭部に谷原前遺跡 (43) があり、佐和町へと入り込む支谷を１㎞ほどさかのぼると南東側台地上に宮田遺跡 (44) がある。宮田遺跡は、東側に小支谷が入り佐和支谷に突出した標高43ｍの舌状台地上に位置し、周辺地域では加曽利ＥⅡ期を中心にＥⅢ期の遺物を多量に散布する遺跡である。更に上流域は標高も50ｍを越え、川幅も狭小になってくる。縄文後期の東京湾水系最奥部に位置する馬蹄形貝塚である誉田高田貝塚（註３）の南50ｍに中堀第１遺跡 (45)、その東南 400 ｍには支谷は異なるが中堀第３遺跡 (46) が、遺物散布の面積・量とも限定される。中堀第３遺跡の対岸台地上標高64ｍの爪ケ子遺跡 (48) は、散布面積はさほど大きくないが、加曽利ＥⅠ期・Ⅱ期の土器を多量に散布する。その他十文字遺跡 (50) で加曽利ＥⅡ期の土器がまとまって散布している程度で、外房有料道路建設により一部調査された中芝遺跡 (47)・清水作遺跡 (51) では出土遺物も少なく、住居址は検出されていない。

都川上流域では、加曽利ＥⅠ・Ⅱ期に小規模な単期的集落の存在はうかがわせるものの終末期遺跡は極めて稀薄な地域といえる。

(4) 仁戸名支流

都川河口より2.8㎞上流の地点、現在東金有料道路と京葉道路の分岐地点（千葉東インターチェンジ）の南側は、都川本流と仁戸名支流の合流点となっている。このあたり本流は東から西へと流れ、仁戸名支流は南東へとさかのぼる。仁戸名支流の東には大宮支谷が刻まれ、両支谷の間に大きな舌状台地が形成され、この台地上では龍ノ谷遺跡(40)が唯一の中期後半期の遺跡である。それに反し仁戸名支流左岸では、本流への合流付近の河成段丘上に、中期後半から後期初頭にかけての地点貝塚を伴う高崎台遺跡(63)をはじめ、その500ｍ上流には東側の小支谷を挟んで月ノ木貝塚(61)とへたの台貝塚(60)の大型馬蹄形貝塚が対峙して所在する。月ノ木貝塚は、1945年武田宗久氏により『千葉市誌』刊行に際しての調査が行なわれ、４址の加曽利ＥⅡ期の住居址が調査された。貝塚本体の形成時期は加曽利ＥⅠからＥⅡ期であることがうかがわれる。へたの台貝塚は、貝層規模は月ノ木貝塚に劣るものの７ケ所の地点貝層からなり、後期の土器の散布も認められているものの貝塚形成時期はほぼ同時期と考えてよかろう。へたの台貝塚の南東700ｍには地点貝塚を有する大宮戸遺跡(59)があるが、広大な台地上に広く加曽利Ｅ期の土器散布は認められるものの遺物量はさほど多くない。大宮戸遺跡の対岸標高45ｍの台地上に展開する大和田遺跡(64)にもその傾向は認められる。

仁戸名支流を3.5㎞さかのぼると誉田二丁目付近に水源を発する平山支谷と、西側の辺田支谷との合流点に至る。辺田支流を臨む北側の標高40ｍの台地上には、後期の馬蹄形貝塚である築地台貝塚(56)がある。1949年・50年　久保常晴氏により、1977年には東金有料道路建設に伴う工事に先行して部分調査がされた。貝塚形成期は後期堀之内Ⅰ期から加曽利Ｂ期であるが、貝層北東部の3000㎡の調査では、加曽利ＥⅣ期のブロック状貝層を伴なう住居址が２址確認されており、中期終末期から後期に継承される集落遺跡として位置づけられる。その対岸にはやはり後期の点列環状貝塚を形成する台畑貝塚(55)が所在し、加曽利ＥⅠ期からＥⅢ期にかけての土器の散布も確認されている。台畑貝塚の南東の越川戸遺跡(54)は、加曽利ＥⅠ・ＥⅡ期の遺跡である。更に1.5㎞上流 平山町のゴルフ場内には長谷部貝塚(53)が所在する。現在ゴルフコースのグリーン下となっており、表面観察は不可能となっているが、戦後数度の調査が行なわれ阿玉台期と加曽利Ｅ期の住居址が調査されている。貝層は標高44ｍの台地上に200ｍ×150ｍの規模でかなり大形の馬蹄形を呈し、その形成期は阿玉台期から加曽利ＥⅡ期及び後期初頭と考えられている。この流域では最も奥部に位置する大型貝塚である。長谷部貝塚の東対岸には東水砂第二遺跡(52)があり、標高44ｍの台地上には２箇所の地点貝層を持つ遺跡で。加曽利ＥⅢからＥⅣ期の遺物を伴なう。

辺田支谷の流域では、1967年加曽利貝塚博物館により調査された菱名貝塚(57)が所在する。

貝層範囲は、直径90ｍと比較的小型の馬蹄形を呈する。標高38ｍの台地上東側の本谷に面して開口部を有する。調査はＡ～Ｆのいずれも貝層中のトレンチ方式により７址の住居址が発見され、１～５号は加曽利ＥⅠ期、６・７号もやはり加曽利Ｅ前半期のものと考えられる。貝塚の形成期としては阿玉台期に創始し、加曽利ＥⅠ期を盛期にＥⅡ期に終結し、加曽利Ｅ終末期の遺物は認められていない。現在貝塚南半が削平されており残存部は北半1／2となっている。菱名貝塚の2.7㎞上流北側の舌状台地上には辺田山谷遺跡(58)が所在する。1984年から85年にかけて台地全域27,000㎡が調査され、加曽利ＥⅠ期の住居址３址が検出された。他に時期不明の住居址１址と加曽利ＥⅢ期の土壙１基が認められているが、この流域はＥ終末期の遺跡は稀薄である。更に上流の野田貝塚の所在が知られているが、現在は削平を受けており、遺跡の内容を知る資料は残されていない。

2. 葭川流域

葭川はその下流で鄙川に合流する。合流地点は現在では市街地の中心部である県庁の西側付近であり、古環境の復原からみても、縄文中・後期には直接湾に流れ込んだ形跡は認められず両河川の合流点から砂洲地形が形成されたものと思われる。合流点より1.6㎞さかのぼると支谷の分岐点に至り、この支谷を荒屋敷支谷と称する。荒屋敷支谷は分岐点より１㎞の地点で東側に廻る谷津と、西側に廻る高品支谷とに分かれ、東西の両支谷によって造り出された台地上は貝塚町貝塚と呼ばれ、縄文前期から後晩期にかけての大小の貝塚が散在する。

荒屋敷貝塚(20)は前記台地の先端部に位置する台門貝塚(22)の北側にあたり、東側の支谷に面している。台地標高は30ｍ前後を測り南側に開口部を持つた南北150ｍ・東西160ｍの馬蹄形貝塚である。現在京葉道路のトンネル上に保存されているが、建設工事に先行して1973年から77年にかけて４回の部分調査が行なわれた。その結果、外縁部と貝塚中央部の状態が若干把握されている。中央部は貝層の堆積がない部分にも住居址群・土壙群が形成されており、全くの無遺構地帯は、直径17ｍの範囲であることが知られ、住居址の中に加曽利ＥⅣ期のものも含まれることが確認されている。貝塚の主貝層の形成時期は、1980年後藤和民氏の調査及び貝層断面等から阿玉台期に始まり、中峠期・加曽利ＥⅠ・ＥⅡ期までが考えられる。荒屋敷貝塚の北側に接し東辺田遺跡(24)があり、1984年国道51号線バイパス工事に先行する調査が行なわれた。道路敷内3,740㎡の調査であったが、加曽利ＥⅣ期の住居址１址・土壙６基が検出されている。調査地点が台地北端部であるため中央部にむけて集落形成の可能性をうかがわせる。荒屋敷貝塚の東支谷をはさんだ対岸の姥ケ作遺跡(27)では、阿玉台・加曽利ＥⅡからＥⅣ期までの遺物散布が認められ、東辺田遺跡よりその量的なものは劣るが、地点貝塚を有する点など近似した遺跡の様相を示す。東辺田遺跡の北側は浅い谷津が入り、加曽利ＥⅠ・ＥⅡ期の地点貝塚を有する貝殻後遺跡(23)、小支谷をはさんで東側に谷津上遺跡(26)が所在する。谷津上

遺跡も国道51号線バイパス工事に先行して3,340㎡が調査され、阿玉台期・加曽利ＥⅢ期・堀之内Ⅰ期の遺物包蔵が確認され、遺構としてはＥⅢ期住居址１址が調査された。

草刈場貝塚(19)は高品支谷に面しており、荒屋敷貝塚の北300ｍに位置する。後期の馬蹄形貝塚であるが加曽利Ｅ期の遺物散布も認められている。北側の草刈場北遺跡(21)、南側に接する向ノ内遺跡(25)も後期主体の遺跡で加曽利Ｅ期の土器は散見される程度である。草刈場貝塚の対岸の貝堤遺跡(29)も同様の様相を呈し、これらは草刈場貝塚との関連で捉えられる。

この地域を荒屋敷貝塚が一つの核として位置付けられるならば、同時期存在の貝殻後遺跡を盛期とし、加曽利ＥⅡ期から遺跡の拡散がはじまり、荒屋敷貝塚の貝塚本体から徐々にはなれ東辺田・谷津上・姥ケ作遺跡へ、あるいは草刈場貝塚周辺へと集団規模を縮めながら移動するという図式が想定される。

葭川の上流は更に二つの支谷に分岐し、北へ遡ぼる西側の本谷と、東側の北東へのぼる廿五里支谷とに分かれる。廿五里支谷には廿五里南・廿五里北・東寺山・東寺山南の大型貝塚遺跡が所在する。

廿五里南貝塚(16)は、周辺地域の開発の先行から形状等明確ではないが、直径150ｍにわたり貝の散布が認められ、部分的な調査として1972年千葉市立高等学校により阿玉台期の住居址１址と、その住居址内貝層に埋葬された加曽利ＥⅠ期の人骨が調査された。また、宅地開発の事前確認調査として1987年貝層内側のトレンチ調査が行なわれ、阿玉台期・中峠期・加曽利ＥⅠ期の遺物を多量に採集している。これらの調査は局部的なものであり、貝塚形成期の断定資料とはなり得ないが、現時点では終末期遺物の伴出をみていないことから、荒屋敷貝塚・加曽利北貝塚等と形成時期を同じくするものと思われる。

廿五里南貝塚の北側は浅く東から入り込む谷津に区切られ、この小支谷の対岸に廿五里北貝塚(15)がある。６箇所の地点貝塚が環状に廻りやはり直径150ｍの規模を有する。遺物の散布が稀薄なためか文献により所属時期にばらつきがみられるが、1982年貝層内側の試掘調査が行なわれ加曽利ＥⅢ・ＥⅣ期の資料も若干認められるものの、遺物の主体は後期にあり堀之内Ⅰ期から加曽利Ｂ期の貝塚とみるのが妥当と思われる。

東寺山貝塚(17)は廿五里南貝塚の600ｍ下流の北へ入る谷津の西側に位置するが、現在みつわ台団地となっている西側の台地に、本谷から入り込む谷津があり、そちらとの関連で捉えられている。現在公園として貝層の大部分は保存されているが、周辺の造成工事に際し貝層断面が露呈し、その観察では阿玉台期・加曽利ＥⅠ期・ＥⅡ期の貝層が確認されている。この貝塚の南にも阿玉台期から加曽利ＥⅠ期の地点貝塚遺跡である東寺山南貝塚の所在が確認されているが、団地造成時充分な調査がされず煙滅した。

葭川の本流は源町の北端に水源を有し南流する。500ｍ程下ると大きく西側へ迂回するが、その突出した舌状台地上に、千葉市動物公園建設に伴い1975年より継続的に調査された餅ケ崎

遺跡(13)が所在する。台地標高は25～28mを測り約50,000㎡余の台地上に、早期撚糸文系住居址1址・茅山期住居址1址と炉穴群・加曽利EⅡ期住居址1址・加曽利EⅣ期を主体に終末期の住居址77址・称名寺期2址（内1址は加曽利EⅣ期と共伴遺物出土）の計81址の住居址が検出された。調査結果については未整理部分を多く残し、後日報告の義務を負う一者として早期の報告書刊行を目指したいが、中期終末の単期形成集落としては周辺地域では類をみない遺跡であり、住居址内投棄貝層の他土壙内充塡貝層も26基検出されていることなどからも、大型貝塚遺跡との関連等今後に多くの問題を提起させる遺跡である。対岸には千葉都市モノレール工事に先行して調査された五味ノ木遺跡(12)が所在するが、加曽利EⅣ期と思われる住居址1址が確認されているだけで、出土遺物も微量で単独住居の可能性が強い。

この流域には規模的には劣るが、終末期の単一時期の集落がある。すすき山遺跡(14)は餅ケ崎遺跡の西山寺の部落をはさんだ東側、葭川本流より東にきざまれた小支谷の谷頭部に所在し、220m×150mと狭小な舌状台地上に展開している。調査は1970年加曽利貝塚博物館によって行なわれ、12址の加曽利EⅣ期の住居址（内5址に貝の投棄が認められたことから、二期に分ける考察もある）と13基の土壙が検出された。集落立地の特徴として台地先端部ではなく、基部に沿って南北に入り込む浅い谷津沿いに住居の配置が認められる。円環状の形体は捉えられるものの台地先端に向かい開口している。

本流と廿五里支谷の合流点に形成された台地上には、蓮台場遺跡（石神遺跡）(18)が所在する。加曽利EⅣ期の遺物包蔵が確認されているが、道路敷の調査では遺構は検出されていないが、周囲に集落の形成が認められる可能性は高い。

廿五里支谷と本流域では遺跡時期・形態とも全く異にし、廿五里支谷側では、加曽利E前半期を中心に、大型貝塚を形成する集落が営なまれるが、EⅡ期を過ぎると遺跡規模が極端に縮小し、反面、本流域では終末期に大型集落が営なまれる。両者ではEⅡ期からの拡散的集落は認められず、EⅢ期においてはほとんど空白に近い状況を呈する。あるいはみつわ台団地造成地内にそれをつなぐ遺跡が所在したのかもしれないが、餅ケ崎遺跡の資料分析は今後大きな意味を持つものと思われる。

3. 浜田川・花見川・汐田川流域

縄文後期には花見川流域では長作築地貝塚（註4）と犢橋貝塚（註5）が、汐田川流域には園生貝塚（註6）が形成されるそれぞれの河川流域であるが、中期の遺跡は数も少なく、規模もさほど大規模なものは認められていない。他の3つの河川に比して延長距離も流域面積も小さいものの住環境が相異するとも考えられず、縄文時代の経過の中で別途考察してみたい（註7）。

浜田川流域では6地点の貝塚が直径100mの環状に廻る奈良熊遺跡(1)が所在する。貝層は

小規模なブロック状で土器の散布も稀薄である。加曽利E期のものであることは確定できるもののいずれも小片で、細分はできていない。立地的には河口より1.5㎞上流の標高23ｍの舌状台地のほぼ中央部である。

花見川は人工堀割川である新川で結ばれ、分水界を越える大改修工事が行なわれており、周辺地形にも大部手が加えられているため未発見の遺跡もあろうかと思われる。

犢橋貝塚の所在するさつきが丘団地の対岸は、本流から東に入り込む支谷に区切られ大形の舌状台地形を造り出し、その台地を区画する小支谷の縁辺部に沿って米之内遺跡(4)・井戸遺跡(5)・外山遺跡(6)・新山遺跡(7)・歯貫遺跡(8)が所在する。米之内遺跡は、加曽利EⅡ期の比較的濃密な遺物散布が確認されているが、その他は遺物量も決して多いとはいえない。外山遺跡はEⅡ期他はEⅢ期の土器が優先する。米ノ内遺跡の北西400ｍ小支谷の谷頭部付近には、馬場塚遺跡(3)があり、1988年1500㎡の調査が行なわれ、加曽利EⅣ期の住居址5址と土壙15基が検出された。若干の称名寺・堀之内Ⅰ期の遺物も認められるもののE終末期の典型的な集落遺跡として捉えられる。遺跡はわずかに西に広がる様相を示している。

その他では長作小学校の東に南門原遺跡(2)があり、加曽利EⅡ期の土器散布が認められている。この流域については調査資料が限定されることと、比較的早い時期に開発が進行したこと等から、実相を把握することが困難であるが、当該時期としては過疎地帯とみることもできる。

汐田川流域では宮野木支谷と園生支谷の合流点に所在する小中台遺跡（新堀込遺跡）(9)と宮野木支谷の谷奥に所在する定原遺跡(10)が調査されている。小中台遺跡は都市計画道路磯辺－茂呂町線建設に伴なうもので道路敷のみの調査で、遺跡西側の一部3,800㎡から加曽利EⅡ期Ⅲ期の住居址各1址と土壙2基が検出されており東側に広がりをみせる新堀込遺跡を含め集落を形成していたものと思われる。ちなみに両住居址とも遺構内投棄の貝ブロックが確認されている。定原遺跡では幅100ｍ・基部から先端部まで300ｍの細長い舌上台地上の70％の調査が行なわれ、加曽利E終末期の土壙4基が検出されたが、調査範囲内では住居址は発見されていない。

園生支谷では狐塚遺跡(11)でEⅢ期の土器散布が、園生貝塚の外縁南東部ではEⅣ期のキサゴ充塡の土壙1基が確認されている。

4. 村田川下流（浜野浦）域

村田川は長生郡長柄町に水源をもち延長20,8㎞、流域面積111.9㎢で、市内の最高標地の土気町から市原市に流れ、下流域は市原市と境して東京湾に注ぐ。下流域右岸は千葉市東南部ニュータウンの造成が進行中で、多くの全面調査された遺跡がある。更に下流では現在湿地帯を形成しており、海岸線の進出が認められ浦地形を呈していたものである。また各支谷の奥部は都川支流の支谷と入り組み複雑な地形を造り出している。

大膳野北遺跡(67)は落井町付近から東へきざまれる支谷の最奥部に位置する。台地標高は50mで沖積地との比高差は27mを測る。支谷の南東側対岸は縄文前・後期の大膳野貝塚が所在する。調査は1980年から83年にかけて8,800㎡が行なわれ、早期の炉穴群と前期の住居址の他加曽利EⅢ期の住居址7址が検出された。EⅢ期の24号住居址炉址内に貝ブロックが確認されている。更に北東部の農業試験場用地内に広がる様相を呈しており、グリッド出土遺物中にEⅡ期土器も認められるものの、EⅢ期の単独時期の中規模集落として位置付けられる。

大膳野北遺跡の支谷を下ると800mでムコアラク遺跡(69)をのせる大きめの舌状台地の東側を画する坂崎支谷の分岐点に至る。ムコアラク遺跡はこの坂崎支谷と木戸面支谷により形成された台地上にあり、木戸面支谷へ突出する小台地を含む台地上は古墳群・古墳時代集落が展開される。木戸面支谷に突出する小台地の谷津沿いには加曽利EⅣ期の住居址2址と、台地のつけね部にかけて土壙群が展開される。DWI号とされた住居址の北東150mにDW50住居址が確認されており、調査区外に広がる可能性もある。

坂崎支谷の対岸には六通金山遺跡(68)が所在する。南側に小さな支谷が入り北方は都川の支谷が接近する。遺跡は舌状台地部と谷頭部へ続く台地の縁辺部との二地点に分けられる。舌状台地部では2基の埋甕施設と土壙群が、北側の台地縁辺では5址の住居址と1基の埋甕が検出された。埋甕はU1～U3ともEⅢ期に、住居址はいずれもEⅣ期のものとみられるが、J01号・J05号を若干新しく位置付けておく。J02号・J03号・J04号には貝ブロックの投棄が認められる。東側未調査区に広がりがうかがえる。

木戸面谷津の奥部に突出する43mの標高を示す舌状台地上には、後期堀之内I期を主体とする小金沢貝塚(70)が在る。舌状台地は100m×120mの小規模なもので、その縁辺からつけね部分へと堀之内期の住居址が円環状に配置されている。これらの中に1(136)号跡・2(141)号跡とされる2址の加曽利EⅣ期の住居址が、遺跡北側木戸面谷津の最奥付近に位置する。台地の中央部を調査前に工事用道路が縦断しており、集落の全様を知るには至らないが、加曽利EⅣ期を創始期に後期に継続する集落が営まれたと考えられよう。

周辺地には加曽利EⅡ期の埋甕1基と土壙1基が発見されたバクチ穴遺跡（文献42）、遺物のみの出土の馬ノ口遺跡・白鳥遺跡等もある。

坂崎支谷の分岐点より下流のイズミ支谷をさかのぼると800mの左岸台地上に有吉貝塚(71)が在る。北側の小支谷をはさんで廿五里南と北・蕨立とさら坊・月ノ木とへたの台などと同じような位置関係で有吉北貝塚(71)が立地する。有吉貝塚については調査記録はないが、周辺の植木畑の株分けによる穴や神社境内・畑地の観察から加曽利EI・Ⅱ期の土器が主体を占め、堀之内・加曽利B期の後期遺物も散見される。有吉北貝塚は既に全面の発掘調査が完了しており、貝塚は点列の環状を呈することが知られている。主貝層の形成時期は、中峠期から加曽利EⅡ期であることが報じられている。貝層は斜面にかかる大きな4ケ所と遺構内堆積の20ケ所

以上の地点貝塚が、120 m × 150 mの範囲の環状に廻っている。遺構内堆積の貝層は加曽利ＥⅠ期からＥⅢ期のものが認められているが、やはりＥⅠ期を主体とする。ＥⅢ期の遺構集中域は外縁部へ広がる傾向を示している。斜面貝層のうち南西斜面の二箇所は中峠期から加曽利ＥⅠ期のもので、北側斜面は加曽利ＥⅡ期に形成されたものである。現在整理中で近々の報告書の刊行が待たれる重要な遺跡である。

南二重堀遺跡(73)は赤塚支谷奥部に突出した舌状台地上に位置し、標高35 mの台地上に在る。南に張り出した台地の南半分にほぼ円環状に７址の住居址が配置される。それぞれの所属時期は87号住居址に若干新しい様相が認められるものの加曽利ＥⅡ期をあててよかろう。貝ブロックを有する86号土壙を含む４基の土壙を含め、加曽利ＥⅡ期の単独期形成の集落の資料として良好のものといえよう。

千葉東南部ニュータウンの造成地内では、公園などとして保存される有吉貝塚・上赤塚貝塚・大膳野貝塚等の大規模遺跡を除くと、ほとんどの遺跡が全面調査が行なわれていることから整理作業が完了した段階では、限定地域内の集落研究は大幅な進展が期待される。

近接する都川支谷の上流域との比較から加曽利Ｅ終末期の集落遺跡が多く認められる傾向を示す。また小規模貝塚を持つ遺跡が多いことも特徴のひとつといえる。

5. 鹿島川流域

鹿島川は他河川と水系を異にし、千葉市域では唯一印旛沼へ注ぐ河川である。延長29㎞・流域面積251.9㎢は周辺では最大数値を示す。土気町付近を水源とする流れと、平川町を水源とする流れの間に形成される大きな台地形に小支谷を刻みながら、富田町付近で合流し更科町・下田町をへて佐倉市に至る。

千葉市内としては比較的開発の波に洗われることなく原地形を留めている地域であり、従って調査資料も少ない。僧御堂遺跡(74)は土気町に水源を持つ本流域に在り、1975年から77年にかけて東金バイパス中野インターチェンジ建設工事に先行して行なわれた調査で23000 ㎡を対象に調査され、加曽利ＥⅢ期から堀之内Ⅰ期にかけての14址の住居址が検出された。加曽利Ｅ終末期の典型的な集落形態を示しており、加曽利ＥⅢ期６址・ＥⅣ期５址・称名寺期１址・堀之内Ⅰ期２址となっている。西側の小支谷から若干台地奥部の標高51 mに立地し、円環状の住居配置が認められる。この流域では僧御堂遺跡の東側本流の対岸には木平台遺跡(75)・800 m程本谷を下ると左岸にムカエ遺跡(79)が、更に下り八街町から流れる支流との合流点との間に形成される大きな舌状台地上には、内堀込遺跡(76)・堀込北遺跡(77)・外堀込遺跡(78)の各遺跡が所在する。内堀込・堀込北では加曽利ＥⅡ期も含むが、ＥⅢ期からＥⅣ期の遺物散布が認められている。

平川町から流れる支流域には、千葉市農政センター用地内の芳賀輪遺跡(81)がある。1975年

以来継続的な調査が行なわれ、現在まで26址の中期後半の住居址が検出されている。内訳は加曽利ＥⅠ期１址・ＥⅢ期23址・ＥⅣ期２址となっているが、縄文時代集落の地点はほとんどが未発掘区となっている。10万㎡余に亘り奈良平安期と加曽利Ｅ期終末の遺物散布が認められている。中心部では５ｍ×150ｍの調査区（第５次調査）から７址の住居址と20基の小竪穴が検出されているが、周辺部に至ってはほぼ同時期に位置付けられる住居間が200ｍもはなれて所在するという展開をみせ、調査進行とともに集落の中心部と周辺部の関係、あるいは集落域の確定等できるものと思われる。現在のところは遺構の分布範囲、集落形成時期の把握は一応できており、前記餅ケ崎遺跡とともに終末期集落としての正確な位置付けを行なってゆかなければならない大規模集落遺跡である。

土気町からの本谷の流れと、平川支流の合流点より下流を鹿島川中流域として捉えておく。合流点の北側台地は東西両側から浅い谷津が入り、大きな舌状台地を形成している。この台地上が出口遺跡(82)で中期後半期の土器散布が広範囲に認められ、主として加曽利ＥⅢ期の土器が目につく。出口遺跡の西側に入る浅い谷津の対岸に山ノ越遺跡(83)が在り、加曽利ＥⅡ期のかなり濃密な土器散布が認められている。合流点の北東の台地上には大規模遺跡は存在しないものの当該期の遺物散布地が10数箇所分布している。そのうち合流点に面する奥堀込遺跡(86)は堀之内Ⅰ期から加曽利Ｂ期にかけての主要遺跡であるが、加曽利ＥⅡ期からＥⅣ期の遺物も多い。支谷を異にする川崎遺跡(84)その南側の上台作遺跡(85)は、ＥⅠ・ＥⅡ期の遺物を主に散見され、周辺地域の主要遺跡といえる。この支谷の上流、合流点より10㎞上流西側台地上には1986年に調査された迎山遺跡(89)が所在し、中峠期から加曽利ＥⅡ期の住居址６址が調査された。中峠期１址・加曽利ＥⅠ期３址、ＥⅡ期２址であり、谷津からはなれた台地中央部に配置される。

御殿支谷の東側台地上にも宇津志野第２遺跡(87)・宇津志野南遺跡(88)が在り、宇津志野第２遺跡では加曽利ＥⅠ期のかなり濃密な遺物が散布している。八街町と境する支谷には小間子遺跡(90)が所在し、ＥⅢ期の遺跡として知られている。

鹿島川流域には遺跡の数的にはかなり高密度の分布が観察できる。特に上流域にＥⅢ・ＥⅣ期の遺跡が多く、中流域でも貝塚を伴わない大型集落が所在するものと思われる。時期的にも長期継続の傾向は認められないもののＥⅠ期からＥⅣ期の遺跡が散見できる。下流域の飯重遺跡（註８）・江原台遺跡（註９）等の集落遺跡とともに、加曽利Ｅ終末期を論ずる場合重要な意味を持つ地域といえる。

註1. 貝塚爽平・杉原重夫　1968年　「加曽利貝塚の地理」『加曽利貝塚Ⅱ』　千葉市加曽利貝塚博物館
　杉原重夫　1988年　「千葉市付近における縄文時代海岸線の位置と古地理」『千葉市立加曽利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』

註2. 武田宗久　1953年　「原始社会」『千葉市誌』

註3. 都川河口より約17km上流に位置する後期の馬蹄形貝塚で、150 m×200 mの規模を要する。阿玉台・加曽利E期の遺物も若干確認されている。貝の移動について立地形に問題点を提起している。
酒詰仲男　1955年　「誉田高田貝塚」　学習院大学高等部史学科
註4. 金子浩昌　1961年　「築地貝塚」『印旛・手賀』　早稲田大学考古学研究室報告第8冊
註5. 戸沢充則　1964年　「千葉市犢橋貝塚」　日本考古学年報　16
註6. 西村正衛　1951年　「千葉県都賀村園生貝塚」　日本考古学年報　1
神尾明生　1952年　「千葉市園生貝塚 1952年トレンチ発掘略報」　千葉大学文理学部人文地理教室　ほか1954 1955・1956年にそれぞれトレンチによる調査が行なわれている。
註7. 縄文中期に限ってみると、村田川流域の有吉・有吉北貝塚を除く加曽利貝塚・蕨立貝塚・さら坊貝塚・滑橋貝塚・長谷部貝塚・菱名貝塚・月ノ木貝塚・へたの台貝塚・荒屋敷貝塚・廿五里南貝塚・東寺山貝塚及び周辺の地点貝塚形成集落から、水路で貝の運搬を行ったとするならば、貝採取の性格上同じ季節の同じような時間帯に、河川を下り千葉海岸に集結したこととなり、集落個々の交流・漁業権の問題等考えてゆかなければならない。また貝殻付きのかなりの重量の貝を数kmをへだてた集落へ運搬加工する必然性も解明しなければならない。
註8. 桑原　護　1974年　『飯重』　佐倉市教育委員会
註9. 鈴木道之助他　1977年　『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ　ー第1次・第2次調査ー』　千葉県文化財センター
内田儀久・田村言行他　1979年　『江原台ー土地区画整理に伴う千葉県佐倉市江原台第1遺跡Ⅱ区の発掘調査』　江原台第1遺跡調査団・佐倉市教育委員会

Ⅲ　遺跡の時期的変遷

中期に限っては馬蹄形・環状を呈する大型貝塚遺跡を、居住空間・生活空間を備えた所謂集落遺跡の範疇で捉えることができる。ほぼ全体の発掘調査が行なわれた松戸市貝ノ花貝塚（註1）・船橋市高根木戸貝塚（註2）・市原市草刈貝塚（註3）・千葉市有吉北貝塚の事例からしても大規模集落が営まれ人口の集結傾向が認められる。千葉市域では13の大型貝塚が所在しており、貝塚形成の始期は、加曽利北・蕨立・荒屋敷・廿五里南の各遺跡では、勝坂・阿玉台期の中期前半期があてられ、月ノ木・菱名・有吉北は若干時期的に下降し、中峠期以後に求めることができる。全く発掘調査が行なわれていなかったり、部分的な調査のみの遺跡が大半を占めるが、形成時期の確定されていない滑橋・廿五里北の2遺跡を除いては、盛期を加曽利ＥⅠ期とすることができ、ＥⅡ期に継承される。

ＥⅠ期では大型貝塚遺跡が都川流域に3・都川仁戸名支流4・葭川流域3・村田川流域2遺跡の計12遺跡があり、その他の遺跡では鹿島川中流支谷の宇津志野第2遺跡・都川上流域の爪ケ子遺跡に濃密な遺物の散布が認められているほか、都川流域及び仁戸名支流域に集中する傾向を示す。また鹿島川中流域の小支谷にはさまれた台地上に小規模であるが土器散布の認められる地点が多い。

ＥⅡ期は大型貝塚形成がひきつづき行なわれるが、廿五里南・東寺山・蕨立などではその規模の縮少傾向が認められるとともに大型貝塚以外の遺跡が増加しており、花見川流域の米ノ内遺跡等市域全体に広がる様相を示す。特に鹿島川上流域に単一時期形成の遺跡が多く認められる。これらの現象は、大型貝塚遺跡内に変化が起こったことが推測され、あるいは人口増加による拡散現象であるか、貝採取による経済基盤に変化があったのかもしれない。

遺跡の増加傾向は更にＥⅢ期に受け継がれ、特に村田川流域・鹿島川流域に顕著になる。し

時期別遺跡分布状況

地域	鄙川流域				仁戸名支谷				鹿川流域				村田川流域				鹿島川流域				沙田川流域				花見川流域				浜田川流域				計			
規模＼時期	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	EⅠ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
◎	3	4	1		4	4	1		3	2		2	2	2			1	1	2							1							13	14	4	2
○	6	4	4	3	4	4	6	2	2		4	4	1	2	4	6	4	11	7	6			2			2	2	1					17	23	29	22
△							1			1	1			1		2											1							2	3	2
−	11	10	6	4					1	1	7	2					1	2		2							1	1			1	1	13	13	15	10
…	3	4	7	2			3				2	3					3	1		1													6	5	12	6
計	23	22	18	9	8	8	11	2	6	4	14	11	3	5	4	8	9	15	9	9			2			3	4	2			1	1	49	57	63	42

かしながら大型貝塚内での集落規模は縮小され、荒屋敷貝塚の外縁部調査あるいは加曽利・有吉北貝塚などで、貝層からはなれた地点への移動現象が認められている。横浜市の二の丸・三の丸遺跡では90址を越えるＥⅢ期の集落が検出されているが（註４）、千葉市域では芳賀輪遺跡にその傾向が認められるものの、大型貝塚内での集落が把握されない段階では大規模集落遺跡は減少しているといえよう。

ＥⅣ期については遺跡数・遺構数とも減じるという指摘がされており、千葉市域においても各地域においてその傾向はうかがえる。しかしながら単一時期の数址の住居址群を検出する遺跡は葭川流域のすすき山遺跡や村田川支流域を中心に調査されており、ＥⅢ期から後期に継承される中野僧御堂遺跡とその周辺遺跡、あるいは餅ケ崎遺跡にみられるような大規模集落も所在することから、極端な差異は認めがたい。また築地台貝塚・小金沢貝塚例のように、後期遺跡に併存する遺跡は今後増加するものと思われる。

註1. 八幡一郎他　1973年　『貝の花貝塚』　松戸市教育委員会
註2. 八幡一郎他　1971年　『高根木戸』　船橋市教育委員会
註3. 高田　博他　1981年　『千原台ニュータウンⅢ草刈遺跡（B区）』　千葉県文化財センター
註4. 富永富士雄　1979年　『横浜市二の丸遺跡の調査』　第３回神奈川県遺跡調査　研究発表要旨
　　伊藤　敦他　1985年　『三の丸遺跡調査概報』　横浜市埋蔵文化財調査委員会

おわりに（集落遺跡研究へのアプローチとして）

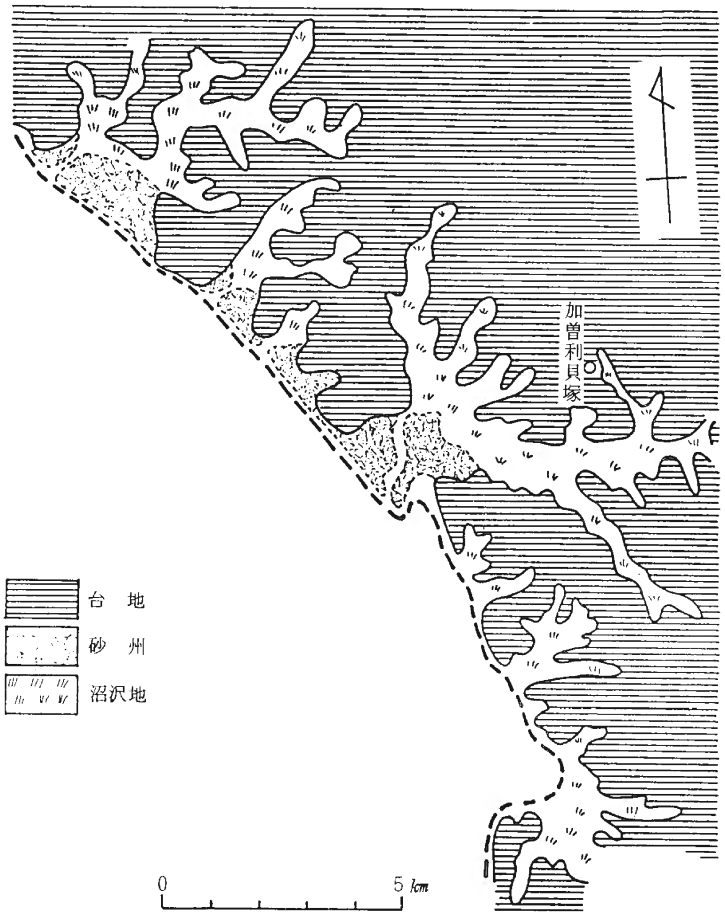
遺跡の分類を試みる場合いくつかの基準となるべく事項が設定される。あるいは限定された地域（空間）であり、一定の期間・時期（時間）であり、遺跡の規模・種別である。これらの組み合せ方、関連付けの方法が方法論であり、その目的とするところは歴史的な文化事象の解明であり、人間社会・生活の復原である。しかしながらそれぞれの基準事項には複雑な諸様相が内在し、単純に比較・分類しえないことは自明のことといえる。時として考古学においては基本資料の操作の段階で、比較尺度を誤ったり、データベースが一定しなかったり、基礎資料に対する誤認から意味不明な結論を招来し混乱をきたすことがある。

集落遺跡の研究においても、その創始から終焉をもって一集落遺跡とされる。しかしながら発

第１図　縄文時代中期後半の遺跡分布

掘調査はあくまでも「跡」の調査であり、経過あるいは過程は「跡」の調査の結果から分析・類推されるものであり、一集落遺跡をとりあげる場合も「とおして集落として位置付けられる遺跡」が全てではないという認識がなされなければならない。すなわち数土器形式時に亘り、広大な面積を領し、遺構・遺物も多種多様で、「跡」として大規模集落とされるものの中にもある期間をもって盛衰があることを忘れてはならない。縄文研究の時間尺度は短かくても数拾年であり、あるいは数百年の大きな目盛りであることから、同時期存在性・継続性の把握は慎重を期さなければならず、数土器形式をへだてた回帰現象の認められる遺跡については継続するヒトの思惟を越えたものであり、一集落遺跡をもってひとつの集落として捉えることに不条理を生じさせる。従って遺跡の分類・パターン化においてはこれらの分析が充分になされなければならないということを確認しておきたい。

今回の一連の作業にあたっても、分布調査資料主体という資料自体の限界性もさることながら、不明瞭要素を多く残すための稿を改め適宜補塡・修正を心がけたい。　（千葉市市民生活局市民課）



第２図　千葉市付近における縄文時代の古地理

4,000～5,000年前の海岸線（破線）と砂州・沼沢地（杉原重夫 1988）

文　献

1. 1953 武田宗久 『千葉市誌』「原始社会」
2. 1954 久保常晴 「千葉県千葉郡築地台貝塚」 日本考古学年報（昭和24年度） 2
3. 1955 久保常晴 「千葉県千葉郡築地台貝塚」 日本考古学年報（昭和25年度） 3
4. 武田宗久 「千葉県千葉市月之木貝塚」 日本考古学年報（昭和26年度） 4
5. 武田宗久 「千葉県千葉市蕨立貝塚」 日本考古学年報（昭和26年度） 4
6. 1959 伊藤和夫 『千葉県石器時代遺跡地名表』
7. 1964 酒詰仲男 『日本貝塚地名表』
8. 1967 武田宗久編 『加曽利貝塚Ⅰ』 貝塚博物館調査資料第1集
9. 1968 滝口宏他 『加曽利貝塚Ⅱ』 貝塚博物館調査資料第2集
10. 1969 後藤和民・庄司克 「千葉市平山町菱名貝塚調査概報」 貝塚博物館紀要2号
11. 1970 滝口宏他 『加曽利貝塚Ⅲ－昭和40・41・42年度加曽利北貝塚調査報告－』 貝塚博物館資料第3集
12. 1971 滝口宏他 『加曽利貝塚Ⅳ－昭和43年度加曽利北貝塚調査報告－』 貝塚博物館資料第4集
13. 1972 後藤和民・庄司克 「千葉市すすき山遺跡調査概報」 貝塚博物館紀要5号
14. 1973 宍倉昭一郎 「廿五里南貝塚」 日本考古学年報 1971年度 24
15. 1973 古内茂 「高品第Ⅱ遺跡」『京葉』 千葉県都市公社
16. 1974 西山太郎 『千葉市荒屋敷貝塚－遺構確認調査報告－』 千葉県都市公社
17. 武田宗久他 『千葉市史』 原始古代中世編 千葉市史編纂委員会
18. 1976 中村恵二・中山義秀他 『千葉市荒屋敷貝塚－貝塚外縁部遺構確認調査報告－』 千葉県文化財センター
19. 武田宗久他 『千葉市史 資料編』 原始・古代・中世 千葉市史編纂委員会
20. 青沼道文 「千葉市芳賀輪遺跡－第1次調査概報－」 千葉市文化財報告第1集
21. 1977 中村恵二・沼沢豊他 『東寺山石神遺跡』 千葉県文化財センター
22. 青沼道文他 『千葉市芳賀輪遺跡－第3次発掘調査概報－』 千葉市文化財報告第3集
23. 中村恵二・斉木勝他 『千葉市中野僧御堂遺跡－千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財報告1－』 千葉県文化財センター
24. 折原繁 「関東地方における縄文中期末の土器群」 千葉県文化財センター 研究紀要2
25. 1978 種田斉吾 『千葉市荒屋敷貝塚－貝塚中央部発掘調査報告－』 千葉県文化財センター
26. 折原繁・斉木勝他 『千葉市築地台貝塚・平山古墳』 千葉県文化財センター
27. 1979 田坂浩・白井久美子 『千葉東南部ニュータウン8－ムコアラク遺跡・小金沢古墳群－』 千葉県文財センター
28. 杉山晋作・中山吉秀・瀬戸久夫他 『千葉市奈木台・藤沢・清水作遺跡－千葉大網白里有料道路建設工事に伴う調査－』 千葉県文化財センター
29. 1980 青沼道文 『千葉市餅ケ崎遺跡発掘調査予報－1979年遺構確認調査概要－』 千葉市文化財抄報1 千葉市教育委員会
30. 小川和博 「千葉県における縄文中期終末の居住形態」 大野政治先生古稀記念論集
31. 1981 関口達彦 『千葉東南部ニュータウン11－六通金山遺跡－』 千葉県文化財センター
32. 後藤和民他 「昭和45・46年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」 貝塚博物館紀要6
33. 1982 郷田良一・小宮孟 『千葉東南部ニュータウン10－小金沢貝塚－』 千葉県文化財センター
34. 田川良・新井和之他 『定原遺跡』 千葉市遺跡調査会
35. 白石浩 『千葉市大膳野北遺跡－千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告－』 千葉県文化財センター
36. 後藤和民・庄司克 「昭和47年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」 貝塚博物館紀要7号

37. 横田正美 「縄文時代中期終末期における文化様相－千葉市すすき山遺跡を中心として－」 貝塚博物館紀要８号
38. 岡崎文喜 「厳立遺跡を中心とした縄文中期初頭集落址の研究」 遺跡研究論集Ⅱ
39. 1983 古内茂他 『千葉東南部ニュータウン12－南二重堀遺跡－』 千葉県文化財センター
40. 横田正美 「柄鏡形住居址とその遺物について－千葉市餅ケ崎遺跡－」 貝塚博物館紀要９号
41. 千葉県教育委員会 『千葉県所在貝塚遺跡 詳細分布調査報告書』
42. 古内茂他 『千葉東南部ニュータウン14－バクチ穴遺跡・有吉遺跡（第３次）・有吉南遺跡－』 千葉県文化財センター
43. 1984 千葉市教育委員会 『千葉市埋蔵文化財分布地図〔改訂版〕』
44. 武部喜充・安藤杜夫 『広ケ作遺跡調査報告』 千葉市遺跡調査会
45. 1985 大野康夫他 『千葉東南部ニュータウン16－大膳野北遺跡－』 千葉県文化財センター
46. 1986 上守秀明 「遺構内堆積貝塚のもつ意味について－有吉北貝塚の一事例の場合－」 研究連絡誌第15・16号
47. 柴田龍司・宮重行 『千葉市辺田山谷遺跡－千葉県小児医療センター（仮称）建設予定地内埋蔵文化財調査報告書－』 千葉県文化財センター
48. 池田大助 『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書－五味ノ木遺跡・殿山堀込遺跡・廿五里城跡・根崎遺跡・京願台遺跡・柳沢遺跡』 千葉県文化財センター
49. 田井知二・今泉潔 『千葉市中薙遺跡－千葉東警察署建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書』 千葉県文化財センター
50. 田井知二他 『千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡－一般国道51号（北千葉バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 千葉県文化財センター
51. 千葉県教育委員会 『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)－千葉市・香取・海上・匠瑳・山武地区－』
52. 1987 上守秀明・宮城孝之 「千葉市有吉北貝塚北斜面貝層の接状剥離作業」 研究連絡誌第20号
53. 田中英世 『千葉市迎山遺跡』 千葉市文化財調査協会
54. 山田貴久・田村隆他 『千葉市小中台遺跡－千葉市都市計画道路３・４・43号磯辺茂呂町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書２ 千葉県文化財センター
55. 加曽利貝塚博物館 『加曽利貝塚博物館20年の歩み－野外博物館をめざして－』
56. 1988 田中英世他 『千葉市芳賀輪遺跡－昭和61年度発掘調査報告書－』 千葉市文化財調査協会
57. 村田六郎太他 『千葉市餅ケ崎遺跡－昭和60年度発掘調査報告書－』 千葉市文化財調査協会
58. 武田宗久 「縄文時代における東京湾東岸地域の海進・海退(1)」『千葉市立加曽利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』
59. 杉原重夫 「千葉市付近における縄文時代海岸線の位置と古地理」『千葉市立加曽利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』
60. 1989 横田正美 『千葉市馬場塚遺跡』 千葉市文化財調査協会
61. 武田宗久 「縄文時代における東京湾東岸地域海進・海退(2)」 貝塚博物館紀要16号
62. 田中英世 「入口施設を有する小竪穴（芳賀輪遺跡12号土壙）について－鹿島川中流域の縄文時代遺跡の研究(4)－」 貝塚博物館紀要16号

縄文中期後半主要遺跡一覧表

凡　例

1. 遺跡番号

2. 所在地現町名

3. 遺跡名称

4. 種別

◦貝塚を伴う遺跡　馬蹄形貝塚・環状貝塚・点列環状貝塚は集落を営む大型貝塚遺跡。

◦集落遺跡は複数住居が同時期・同時代に営まれ集落を形成していたか形成された可能性の高い遺跡。

◦包蔵地は集落形成はないが、遺物包含層あるいは土壙等の遺構の検出された遺跡。

◦散布地は土器等の時期判定のできる遺物が散布し、同期の遺構検出の可能性のある遺跡。

5. 立地　台地上・緩斜面・斜面・低湿地等遺跡の所在地形。

6. 標高　千葉市1／10,000の都市図上等高線による標示。

7. 遺跡所属時期　中期後半については、中峠・加曽利ＥⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期に細分他は一括。あくまでも中期後半期の主要遺跡を抽出したものである。

◦◎遺跡形成の主体を成し、他遺跡との比較からも規模の大きいもの。

◦○遺跡形成期の中で中程度の規模を要し、他遺跡との比較からも中規模のもの。

◦△発掘資料から遺物包含はするが、稀薄で住居址等の検出されないもの。

◦－遺物散布が認められるが、明確な時期細分のできなかったもの及び集落遺跡で完掘はされていないが、遺物・遺構の検出が予測されるもの。

◦…－の遺物量が稀薄で、遺構等の検出される可能性の少ないもの。

極めて主観的な分類であるが上記を一応の基準とする。

8. 水系

◦葭川本流を西・廿五里支谷を東・荒屋敷支谷を荒とした。

◦都川本流の上流域を上・中流域を中・中流域から分岐する古山・大道山支谷域を古、仁戸名支流域のものを仁として一括した。

9. 関連文献を後記の文献番号と対照させたが、文献資料の多いものについては、本稿に直接係りのないものは省略した。

縄文中期後半期主要遺跡一覧表

番号	所在	遺跡名	種別	立地	標高	早期	前期	中期前半	中峠	加E I	加E II	加E III	加E IV	後期	晩期	水系	文献	備考
1	幕張町	奈良熊	集落	台地上	23						−	−				浜田川		点列環状貝塚
2	長作町	南門原	散布地	台地上	22～24						○					花見川		
3	犢橋町	馬場塚	集落	台地上	26							…	○	…		花見川	60	
4		米ノ内	散布地	台地上・緩斜面	20～26						◎			…		花見川		
5		井戸	散布地	台地上	26						…	−	−	…		花見川		
6		外山	散布地	台地上	25						○					花見川		
7		新山	散布地	台地上・緩斜面	20～24							○				花見川		
8		畠貫	散布地	台地上	25							○				花見川		
9	小中台町	小中台	集落	台地上	28							○				汐田川	54	貝ブロック　新堀込遺跡に同じ
10	宮野木町	定原	包蔵地	台地上	25							○				汐田川	34	土壙4基
11	園生町	狐塚	散布地	台地上	25～26							○				汐田川		
12	荻台町	五味ノ木	集落	台地上	25～26		○						○	○		葭川西	48	
13	源町	畊ケ崎	集落	台地上	22～28	○	△				△	○	◎	○		葭川西	29. 40. 57	遺構内貝層
14		すすき山	集落	台地上	25～27		△					△	◎	△		葭川西	13. 37	遺構内貝層
15		廿五里北	馬蹄形貝塚	台地上	29					−	−	−	−	◎		葭川東		
16	東寺山町	廿五里南	馬蹄形貝塚	台地上	28			◎	◎	◎	○	−	−	−		葭川東	14	
17		東寺山	馬蹄形貝塚	台地上	29			◎	○	◎	○	−	−	−		葭川東	17. 19	
18		蓮台場	包蔵地	台地上・緩斜面	24～27	○							○	△		葭川東	21	石神遺跡
19	貝塚町	草刈場	馬蹄形貝塚	台地上	28～30						…	…	…	◎	◎	葭川荒	17. 19	
20		荒屋敷	馬蹄形貝塚	台地上・斜面	25～30		○	◎	○	◎	◎	○				葭川荒	16. 18. 25	
21		草刈場北	散布地	台地上	29					−	−	…	…	○		葭川荒		
22		台門	馬蹄形貝塚					…	−	−	−	−	−	◎	◎	葭川荒	17	
23		貝殻後	散布地	台地上・斜面	24～29					◎	◎					葭川荒		地点貝塚
24		東辺田	散布地	台地上	28～30			○					○	○		葭川荒	50	地点貝塚　荒屋敷北貝塚
25		向ノ内	散布地	台地上	30			−	−	−	−	−	−	−		葭川荒		地点貝塚
26		谷津上	集落	台地上・緩斜面	27～29							○		○		葭川荒	50	
27		蛯ケ作	散布地	台地上	28～32			○				○	○	○		葭川荒		地点貝塚
28	高品町	高品第2	集落	台地上												葭川荒	15	
29		貝堤	散布地	台地上	26	△	○		…	−	−	−	…	○		葭川荒		地点貝塚
30	桜木町	加曽利		台地上・緩斜面	20～31	−	○	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	都川古	8. 9. 11. 12. 32. 36	北貝塚・南貝塚・東傾斜面周辺を含む
31		京願台	集落	台地上	28	○			△	○	◎	○				都川古	48.	
32	加曽利町	花輪	馬蹄形貝塚	台地上	26～28						…	…	…	◎		都川古		
33	小倉町	滑橋	点列環状貝塚	台地上・緩斜面	31～33						○	◎	◎	△		都川古		
34		広ケ作	集落	台地上	29							○	○			都川古	44	遺構内貝層

番号	所在	遺跡名	種別	立地	標高	早期	前期	中期前半	中峠	加E I	加E II	加E III	加E IV	後期	晩期	水系	文献	備考
35	小倉町	中雍	集落	台地上	31							−	○	−		都川 大	49	
36	千城台西	さら坊	点列環状貝塚	台地上	23			−	−	−	−			−		都川 大	17	
37		蕨立	点列環状貝塚	台地上	35			◎	○	◎	○	−				都川 大	1.5.17.19.38	
38	坂月町	台	散布地	台地上・緩斜面	30〜34					−	−	−	−	−		都川 大		地点貝塚
39	大宮町	押元	馬蹄形貝塚	台地上・緩斜面	18〜24					…	…	…		◎		都川 中		
40		龍ノ谷	散布地	台地上・緩斜面	20〜32		…	○	−	○	○	…	…	○		都川 中		地点貝塚
41		網田	散布地	台地上・緩斜面	25〜28			−	…	−	−	…				都川 中		
42	北谷津町	上ノ台	散布地	台地上	39〜41				−	−	−	−	−	−		都川 上		
43	高根町	谷原前	散布地	台地上	34					…	−	…				都川 上		
44	中田町	宮田	集落	台地上	43						◎	○		…		都川 上		
45	高田町	中堀第一	散布地	台地上	52					○	○	−	−	…		都川 上		
46		中堀第三	散布地	台地上	50〜53		…			−	−	−				都川 上		
47		中芝	散布地	台地上	57					○						都川 上	28	
48		爪ケ子	散布地	台地上	63					◎	◎					都川 上		
49	誉田町	十文字南	散布地	台地上	64〜66					○				○		都川 上		
50		十文字	散布地	台地上	58	…					◎					都川 上		
51		清水	散布地	台地上	60			△	…	○	…	…		△		都川 上	28	
52		東水砂第二	散布地	台地上	46〜48							○	○	…		都川 仁		点列貝塚
53	平山町	長谷部	馬蹄形貝塚	台地上	40〜44			◎	−	◎	◎			○	△	都川 仁	17.19	
54		越川戸	散布地	台地上・緩斜面	36〜40			△		○	○					都川 仁		
55		台畑	点列環状貝塚	台地上・緩斜面	32〜39			○	−	○	○	○		…		都川 仁		
56		染地台	馬蹄形貝塚	台地上・斜面	40								○	◎	○	都川 仁	17.19.26	
57		菱名	馬蹄形貝塚	台地上	36〜38			○	−	◎	◎	○				都川 仁	10.17.19	
58	辺田町	辺田山谷	集落	台地上	46〜48	◎		△		○		△	△	△		都川 仁	47	
59	川戸町	大宮戸	散布地	台地上・緩斜面	26〜29					…	…	…				都川 仁		地点貝塚
60	仁戸名町	へたの台	点列環状貝塚	台地上	25〜26			○	−	◎	◎					都川 仁	17.19	
61		月ノ木	馬蹄形貝塚	台地上	25					◎	◎	○		○		都川 仁	1.4.17.19	
62	星久喜町	道免	散布地	台地上	10	△		△		○	○	…		○		都川 仁		地点貝塚
63		高崎台	散布地	台地上・緩斜面	10〜17					−	−	…		◎		都川 仁		地点貝塚
64	大宮町	大和田	散布地	台地上	34〜35		…			○	○			…		都川 仁		
65	大木戸町	大野	集落	台地上	80					○	○	○				村田川 上		
66		南大野	集落	台地上	90						○	○	○			村田川 上		
67	大金沢町	大膳野北	集落	台地上	50	○	△					○	○		△	村田川 浜	35.45	土壙内貝ブロック
68		六通金山	集落	台地上	46	◎	○					○	○			村田川 浜	31	住居内貝ブロック

番号	所在	遺跡名	種別	立地	標高	早期	前期	中期前半	中峠	加E Ⅰ	加E Ⅱ	加E Ⅲ	加E Ⅳ	後期	晩期	水系	文献	備考
69		ムコアラク	集落	台地上	44	◎							○			村田川 浜	27	
70	小金沢町	小金沢	集落	台地上	42							○	○			村田川 浜	33	点列環状貝塚
71	有吉町	有吉	馬蹄形貝塚	台地上・斜面	36～40					◎	◎			○		村田川 浜	17	
72		有吉北	点列環状貝塚	台地上	20～33				○	◎	◎	◎	○	△		村田川 浜	46. 52	
73	生実町	南二重堀	集落	台地上	30	○	△	△			△	○	△			村田川 浜	39	
74	中野町	僧御堂	集落	台地上	48～53							○	○	○		鹿島川 土	23. 26	8号住貝ブロック
75		木平台	散布地	台地上	60～62							○	○	…		鹿島川 土		
76		内堀込	散布地	台地上	48						○	○	○			鹿島川 土		
77		堀込北	散布地	台地上・緩斜面	42～48						○	○	○	…		鹿島川 土		
78		外堀込	散布地	台地上	48							○	○	…		鹿島川 土		
79	和泉町	ムカエ	散布地	台地上	42					…	○					鹿島川 土		
80	富田町	本宮	散布地	台地上・緩斜面	87						○					鹿島川 土		
81	野呂町	芳賀輪	集落	台地上	45～47	△	△				○	◎	○			鹿島川 平	20. 22. 56. 62.	
82	上泉町	出口	散布地	台地上	40～42					…	…	○	…			鹿島川 中		
83		山ノ越	散布地	台地上	39～41					…	◎					鹿島川 中		
84	更科町	川崎	散布地	台地上	28～30					○	○					鹿島川 中		
85		上台作	散布地	台地上・緩斜面	36～38			○	－	○	○					鹿島川 中		
86		奥堀込	散布地	台地上	24～26					○	○	○	－	◎		鹿島川 中		
87	御殿町	宇津志野第二	散布地	台地上	38～39					◎	○					鹿島川 中		
88		宇津志野南	散布地	台地上・緩斜面	36～40		…			－	－					鹿島川 中		
89		迎山	集落	台地上	37	○			○	○	○					鹿島川 中	53	
90	小間子町	小間子	散布地	台地上	35						○	◎	－			鹿島川 中		